

花おりおり

2025. 5. 11

銭葵	
	<p>原産地：南ヨーロッパ、西南アジア、江戸時代に中国から渡来。初夏ピンク色で大きな脈が入ることで、花に紫の線が入りアクセントがつき、見栄えがする5弁花が咲く。丸い花が「一文銭」ぐらいの大きさだったことから「銭」、「立葵」の葉っぱに似ているので「葵」。花、葉、根などは薬用になる、花は乾燥させてハーブティーにも利用される。花期：6～8月</p>
スカシユリ	
	<p>もともとは中部地方以北の海岸砂浜や山地に自生しているユリ、栽培種は、江戸時代にエゾスカシユリとイワトユリを主として交雑育成されたものと言われている。花が美しく、丈夫であること、そして、何よりも、花が上向きに咲くという特性を持っている。 スカシユリの名前の由来は、花びらの間が透いていることからきている。4月28日の誕生花</p>
庭石菖（ニワゼキショウ）	
	<p>文目（あやめ）科 きれいな小さい6弁花を上向きに咲かせる。花は一日花で、白色または淡紫色で、紅紫色の筋が入り、中心部は黄色。光沢のある球形の蒴果ができる。葉が石菖（せきしょう）というサトイモ科の植物に似ていて、庭によく生えるところから、庭石菖の名になった。多年草／常緑。別名：「南京文目」（なんきんあやめ）。原産地：北アメリカ、1890年頃に渡来。</p>
折鶴蘭	
	<p>百合（ゆり）科 原産地：アフリカとインドを中心とした熱帯南アフリカ。細い葉っぱが垂れ下がり、先端近くで花を咲かせる。枝先の子株の姿が、折り紙の「折鶴」に似ている。ラン（蘭）という名がついているが、ラン科の植物ではなくキジカクシ科、オリヅルラン属の植物。</p>

<p>雪の下</p>	
	<p>花を白い花を雪に見立て、花(雪)の下に緑の葉があるところから、また白い舌状の花の形から「雪の舌」、それが転じて「雪の下」との説また花を白い花を雪に見立て、花(雪)の下に緑の葉があるところからきているという説などがある。5枚の花弁のうち長く伸びる下2枚の花弁が目立つ。株元から匍匐茎を伸ばして、先端に我が庭のあちこちに自生する。原産地：日本（本州～九州）、中国。別名：イワブキ（岩蔭）・キジンソウ（貴人草）・虎耳草</p>
<p>日光キスゲ（禅庭花（ぜんていか））</p>	
	<p>百合（ゆり）科 本州などの高原に普通に見られるが、東北地方や北海道では海岸近くでも見られる。日光の霧降高原、尾瀬ヶ原、霧ヶ峰などの群落が有名で、花が黄色で葉がカサスゲ（笠萱）に似ているため、地名を付けてニッコウキスゲと呼ばれるようになった。花期は5月上旬から8月上旬。草原・湿原を代表する花で、群生すると山吹色の絨毯のようで美しい。朝方に開花すると夕方にはしぼんでしまう一日花。花言葉は「日々あらたに・心安らぐ人」</p>
<p>苧環（オダマキ）</p>	
	<p>開花時期は、4/1～ 5/15頃。別名：「糸線草」（いとくりそう）。北半球の温帯に分布する宿根草。日本に自生する在来種はオダマキの名で親しまれているが園芸店に並べられているものはヨーロッパや北アメリカのものを改良した園芸種でアキレギアとも呼ばれる。花びらが中心にあり、広がって付くのが萼でよく目立つ。古くから栽培されている多年草で、春から初夏に独特の形・様々な色の花を俯くように咲かせる人気の植物、しかし、オダマキ属は毒草でもあるので注意が必要。</p>

片喰 カタバミ



クローバーのような3枚葉と小さな黄色い花。葉っぱは、雨が降ったり夜になると閉じる。花は春から夏にかけて咲道端でよく見かける。葉っぱが赤紫色のものは「赤片喰（あかかたばみ）」と呼ぶ。「傍食」「酢漿草」とも書く。英名：オキザリス。
花がピンク色のものはムラサキカタバミと云う。

口紅シラン



日本(本州・四国・九州・沖縄)、台湾、中国などに分布するランの仲間紫蘭のうちリップの先が赤紫色に染まる種類が口紅紫蘭。通常花や白花の種類と違って繁殖力が少し弱めな気がする。花 期：4～5月、高 さ：30～70 cm 多年草

小手毬（こでまり）



小さな花が丸く集まり手毬のように咲くことから、「小さな手毬」で「小手毬」。枝は弓状に垂れ下がる，草丈／樹高1～1.5m。生け花の材料や茶花として利用される。
4月2日の誕生花。花言葉は「友情」。原産地：中国南東部
開花期：4月中旬～5月中旬 別名：スズカケ・テマリバナ

<p>空木 (卵の花)</p>	
	<p>雪の下 (ゆきのした) 科 開花時期は、5/20 ~ 6/5 頃。髓茎や根の (中心にある部分) が空洞になっているので、「空ろ木 (うつろぎ)」→「空木」になった。別名:「卵の花」(うのはな) 卯月 (旧暦4月) に咲くことから。「うつぎの花」の略とも。「雪見草」(ゆきみぐさ) 見た目が雪のよう。</p> <p>♪卵の花匂う垣根にホトトギス・・・ 懐かしい「夏が来ぬ」を口ずさむ、一気に夏が到来。</p>
<p>都忘れ (野春菊 (のしゅんぎく)、東菊 (あずまぎく))</p>	
	<p>菊に似た、紫色の可憐な花。日本原産。</p> <p>鎌倉時代の西暦 1221 年、承久の乱に敗れて佐渡へ遠流となった順徳帝が、草でぼうぼうになった佐渡の庭に一茎の野菊が紫色に咲いているのを見つけ、「紫といえば京の都を代表する美しい色だったが、私はすべてをあきらめている。花よ、いつまでも私のそばで咲いていておくれ。都のことが忘れられるかもしれない。お前の名を今日から都忘れと呼ぶことにしよう」と、傷心のなぐさめにした、という説話がある。花の名はここからきたようだ。また、京を去るときにこの花を目にとめて都を忘れることにしよう」といったことからこの名前になったとの説もある。</p>
<p>紫蘭 (シラン)</p>	
	<p>紫色の蘭であることから、この名になった。ランと聞くと栽培が面倒と思われがちだが、丈夫で育てやすいランの入門品です。春、地下に連ねた扁平な地下球 (偽球茎) からササのような葉茎を伸ばし、先端に赤紫色の華麗な花を咲かせる、晩秋には葉を落とし休眠する、結実するとタネを飛ばし、気づかぬうちに庭のあちらこちらから小苗が発芽することあり。別名: 紅蘭</p>

<p>釣鐘水仙</p>	
	<p>葉っぱは水仙に似て、花は釣鐘状。ゆり科ツルボ属の多年草4～5月頃に開花。スイセン(水仙)となっているが、葉の形が似ているからでスイセン(水仙)の仲間ではない。ちなみにスイセン(水仙)はヒガンバナ科である。</p>
<p>ガクアジサイ (額紫陽花)</p>	
	<p>アジサイ科に属する日本固有の落葉低木。太平洋沿いの限られた暖地（伊豆半島、三浦半島、房総半島、足摺岬、伊豆諸島、硫黄列島、和歌山県の神島）に分布し、海岸付近の崖地などで稀に自生が見られる。ガクアジサイの開花は5～7月で、開花期間はアジサイより長い。花の色は藍色が基本だが、ピンク、白、紫のバリエーションがあり、初夏に咲く清楚な花が美しい。 原産地：日本</p>
<p>ヒメウツギ</p>	
	<p>雪の下 (ゆきのした) 科 アジサイ科ウツギ属の落葉低木で空木によく似ていて、花のサイズが少し小さいところから姫空木。花は白花で、円錐状に小さな花がたくさん咲く。原産地：日本（関東以西の本州、四国、九州の山地）</p>
<p>シンビジュウム</p>	



蘭科。学名：Cymbidium：

花色豊富。春に咲くものが多いが、四季咲きもある。花言葉は「野心、大志、誠実な愛情、熱心さ」原産地：アジア、オセアニア（現在の交配種のもとになった原種は主にインド、ネパール、ミャンマー、中国、タイ）開花期：12月～4月（3月～4月がピーク）

ホトケノザ



シソ科オドリコソウ属の冬生一年生雑草。開花期は3～6月頃ですが、秋にも咲く場合もある。高さは10～30cmほどで、庭の至る所に生えてくる。仏様が座る台座に葉の形が似ていることから、ホトケノザと名づけられたと云う。「春の七草」のホトケノザは、キク科の「コオニタビラコ（小鬼田平子）」を指し、雑草のホトケノザは食用にできないので要注意。シソ科オドリコソウ属の冬生一年生雑草。開花期は3～6月頃だが、秋にも咲く場合もある。高さは10～30cmほどで、庭の至る所に生えてくる。仏様が座る台座に葉の形が似ていることから、ホトケノザと名づけられたと云う。「春の七草」のホトケノザは、キク科の「コオニタビラコ（小鬼田平子）」を指し、雑草のホトケノザは食用にできないので要注意。